

アトリエ
訪 問

第 24 回

浅田政志

写真家

家族をテーマに、ユニークな写真を撮り続けている
写真家・浅田政志。

映画「浅田家!」のモデルとしても知られる彼の作品は、
どのようにして生まれるのだろうか。

その自宅を訪ね、撮影の裏側取材した。

撮影 伊東俊介





仕事部屋のメインとなるスペース。正面の大漁旗がひときわ目を引く。

三重県は津駅から車で走ること30分弱。浅田邸を探し、あたりを見回していると、手を挙げてこちらに微笑みかける男性と目が合う。玄関先で出迎えてくれたのは、浅田政志その人だった。

——こちらはアトリエではなく、ご自宅なのですね。

浅田 そうです。いつも撮影や打ち合わせには自分が出向くので、仕事相手を迎えることは新鮮です。

——東京で長く活動されていたかと思うのですが、地元である津に拠点を移された理由を教えてください。

浅田 戻ってきたのは、3年ほど前なんですよね。息子が小学校に入学するタイミングで帰ってきました。東京には24歳のときに出了たので、住んでいたのは15年くらい。最初は意気揚々と出て行ったんですけど、30代半ばくらいになって、どんどん三重が恋しくなってきました。今はリモートワークが進んだこともあり、撮影のときだけ現場に行くことが多いです。

——全国に撮影に行くのは大変ではないですか。

浅田 朝5時半ぐらいの津駅発の電車に乗ると、8時半には東京に着くん

被写体の方に 撮影楽しかったな と思ってもらいたい。

ですよ。日帰りもできる。大阪や名古屋……日本全国に撮影に行くとすると、三重県は真ん中あたりなので、都合がいいです。

——ご自宅ではどんな仕事をされていますか。

浅田 撮影した写真は、1日だけでも何百枚にもなるので、それをセレクトしたり、画像データを調整したりします。特にセレクトは、なるべく撮ったその日にやるように心がけています。撮った日だと、頭の中に映像が残っているので、どのあたりがよかったかわかるので。早く見た

いだけ、というのがありますが(笑)。——ご自宅のお気に入りのポイントを教えてください。

浅田 この家は地元の友人に設計してもらったんですが、その方のアイデアで壁に写真を飾れるようになっているんです(※1)。毎日眺めるわけではないけれど、ふとしたときに見たり、その存在が感じられたりすることが写真を飾るメリットだと思っています。

——令和7年度版中学校『美術1』の巻頭では、12名の中学生に被写体になってもらい、どんなポーズや表情にするか一緒に考えながら作品を撮りおろしていただきました。

浅田 大人数での撮影のときに心がけているのは、全員のキャラクターをちゃんと立たせること。人数が多くなってくると、一人くらいいてもいなくても変わらないような感じになってしまうがちです。全員がいるからこそ、1枚が成り立っているようなものを撮れたらベストだと思います。



※1 壁面の写真は、浅田さんがいちばん好きだと語る津の海で撮影されたもの。手前が津の海のシンボルマークともいえる造船所、奥が浅田さんお気に入りの赤い灯台というふうに、その場所に立ったときのように見える配置になっている。



玄関に飾られた大きな作品は、『浅田家』の続編ともいえる写真集『NEW LIFE』に収録された一点。

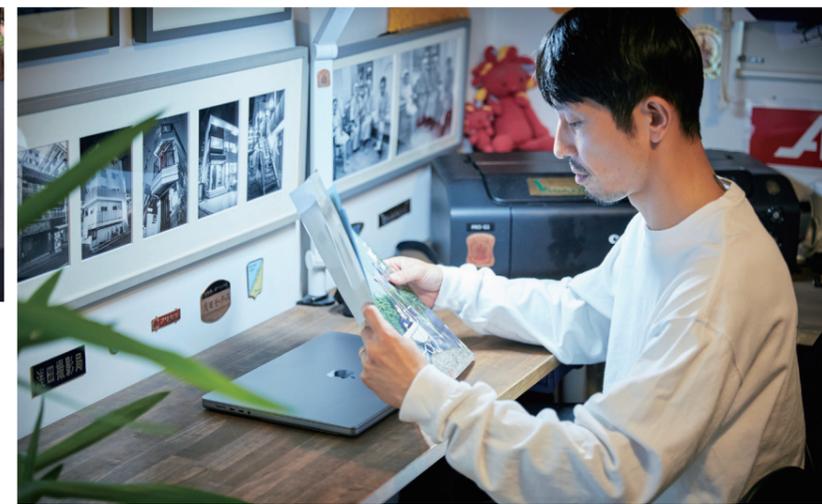


浅田さんが中学生とともに作り上げた作品は、ぜひ中学校の新版教科書『美術1』P.2~3にてご覧ください。

編集部が持参した教科書の校正紙を厳しい目でチェックする浅田さん。



上／撮りおろし作品の撮影風景。作品とともに掲載される谷川俊太郎氏の文「うつくしい!」に寄せて、生徒たちが「うつくしい!」ものを探しているシーンを演出する形で撮影が行われた。(写真:編集部)
下／同じく撮影風景。たった今撮影した写真を、参加者全員で確認中。(写真:編集部)



——被写体のポーズはどのように決めているのでしょうか。

浅田 例えばジャンプしてもらった子がいるのですが、みんなに「誰がいちばん跳ぶのに向いているか」というのを聞いて決めました。子どもに聞くと「こいつはバレー部だから」とか「おもしろいから」とか、いろいろ話が出てきます。僕が一方向的に役割を与えるのではなくて、子どもと一緒に考えて、一人一人の性格などもふまえながらつくっていきました。

——写真を撮るうえで、大切にしていること、心がけていることを教えてください。

浅田 仕事として撮っている以上、最終的には誰かに見てもらうという目的はありますが、まずは被写体の

方に「撮影楽しかったな」と思ってもらいたい。それから、撮ったものがその方にとって特別な写真になったら嬉しいなと思っています。

——これから写真を撮ろうと思っている中学生にアドバイスをお願いします。

浅田 今の中学生は、どうやったらうまく撮れるか、よく見えるか、といったことが体に染みついていて、

自然に撮れる世代に見えるんですよ。ですから、思う存分撮ってもらえれば、すごくいい写真になると思います。街をただぶらぶら歩いているのと、何かを撮ろうと思って歩くのでは、見えるものが全然変わってくる。だから、スマートフォンでもタブレットでも、レンズを向けてじっと見て、素直にいっぱい撮っていったらいいと思います。



あさだ・まさし
1979年三重県生まれ。日本写真映像専門学校研究科卒業。2009年、写真集『浅田家』(赤々舎)で第34回木村伊兵衛写真賞を受賞。2020年には著書の『浅田家』、および『アルバムのカラ』(赤々舎)を原案とした映画『浅田家!』が全国東宝系にて公開される。2023年、新作撮りおろしによる初の劇場での個展「浅田政志展 | YOKOHAMA PHOTOGRAPH -わたし/わたしたちのいま-」を神奈川芸術劇場で開催。